

こころ日記「ぼちぼち」 その④

脇野 千恵

そろそろ身辺整理？

同級生や仕事仲間などが早世していく中、自身の諸々のことを整理し始めている。

その一つが、亡き父母の遺品。

父が亡くなって46年、母が亡くなって10年。ほとんどの遺品は処分したものの、ずっと手つかずの段ボール箱がある。

父は1901年生まれ。よく「自分は昭和天皇と同じ年に生まれたんや」と言っていた。

広島県某市で、商売をする比較的裕福な農家に生まれたいらしい。長男なので、弟たちとは一段上の板間で、弟たちは麦飯で、父は白いご飯を食べていたそうだ。

しかし父が10歳になる頃、父親が病死し、長男である父が家族を支える責務を負わされることに。尋常小学校に行くも、よく祖母が学校にやってきては、連れ戻したらしい。父は勉強がしたかったとよく言っていた。成績も良く、卒業式で答辞を読むことになっていたが、いつのまにか、その役は村長の息子に入れ替わっていた。そんなエピソードを話してくれたことがあった。

思春期の頃、「路傍の石」という小説に出会った。何だか父の境遇と似ているなと思った。

古いモノクロ写真

一枚の大きな写真がある。父の郷里、地元の神社の普請中の写真だろうか。たくさんの村人が写っている。100年以上も前の風景だ。足場に上っている少年に目が留まる。小学生だろう父の姿だった。何かしら寂しそうな表情に、もうこの頃は父親もいなくて、大変な生活を送っていたのだろうなと想像できた。

その写真と一緒に、父の祖父母らしき人たちの額入りの写真もある。おそらく座敷など

に飾られていたのだろう。よく田舎の座敷に

先祖代々の人々がズラッと並んで、上から家族を見下ろしているあれだ。

目の細いおちょぼ口の品のあるお婆さん。お爺さんは、耳当てのないロシア帽らしきものをかぶり、マントを着ている。広島ってそんなに寒い所だったか。

私とは少しも似ていないが、おそらく私の曾祖父母なのだろう。そう思っておこう。



父の父親、つまり私の祖父は、日露戦争（1904～5）に行くと、父から聞いた。露西亜に勝ったことを祝い、提灯を持って村中を歩いたとか。教科書で習ったあの日露戦争。これを聞くとへえーと思うかもしれないが、私は父が52歳のときの子だから、それもありうる話だ。歴史で学んだ日露戦争が、急に身近な出来事になったのを覚えている。

曾祖父がかぶっていた帽子は、ひょっとして息子が戦争帰りに持ち帰ったものか、と想像してしまった。

親戚一同に会した写真があった。裏には、並んで座る人、立つ人の順に名前が書かれている。その人たちの関係は全くわからないが、名字からして、私の祖先達だ。時代はいつごろか、おそらく大正初期と思われる。そこにはちゃんと、父とその弟たちも並んで写っていた。

私は父の若い頃を全く知らない。何せ生まれた時は、白髪交じりのおじいさんだったか

ら。友達のお父さんが若いのを、羨ましく思ったものだ。

若い父の写真を見ると、父の人生を思い描く。たくさんの家族との暮らしは、どんなだったのだろうか。どうして、家族を置いて都会に出たのか。仕事は、結婚は、知らないことが多すぎる。実は、父はこの前の戦争で徴兵されている。40歳は過ぎていただろうか。もう終戦間近、戦争に赴く若者が少なくなっていたからだろう。戦死していたら、もちろん私は生まれていない。

これも私が遅くにできた子なので、友人に父親が戦争に行ったと話すと、いつも驚かれた。いつの間にか、父のことは話さないようになっていったのを覚えている。

私が思春期のころ、父はもう病床にあったから、ほとんど晩年の父しか知らない。手元にある数少ないモノクロ写真からでしか、父のことを知ることができない。



一方母の写真と言えば、3つ参りに写真館で撮ったらしき母親との写真があった。

母は死ぬ間際まで、ずっと自分の母親のことを慕い続け、思い出しては涙を流していた。なぜにそんなに泣くのか、理解できなかったが…。

母親は産後の肥立ちが悪く、それが元で亡くなっただけだ。母が7歳のときだ。昔は、親が早死にするのは珍しいことではない。今は長生きしすぎるが。

母は長女。下に弟たちが次々生まれるも、1歳を待たずに死んでしまっていた。そして4番目の弟を産んですぐに亡くなったとか。母親にとっても大事にされていたこと、優しい人だったと、よく聞かされた。

母は母親になり、自分の子どもに優しくなれなかった人だ。母の人生に何があったのだ

ろうかと思う。私と母とのそんな写真がないのは、ちょっと寂しくもある。

唯一母の独身時代の若い写真もあった。大手百貨店にいたらしいが、大勢の社員の中にいる。母にもキャリアウーマンの頃があったのだと、ちょっと驚く。

戦後男性が少ない中、結婚したくてもなかなかできなかった時代。30歳過ぎて17歳年上の父と出会った母は、晩婚だった。父とはどこで、どうやって知り合い結ばれたのか。2人で写る写真は、1枚もない。

明治生まれの父は、家では厳格だったので、夫婦で仲睦まじくといったことはしなかった。母の50代は、父の介護だったことを振り返ると、気の毒だったなと思う。

家族の写真

さて、これらの古い写真を手放すべきか迷っている。私のルーツでもあるけれど、これから先、きっと誰も手に取ることはないだろうとも思う。もういいよねと、写真の人に話しかけてみるが、答えはない。

写真は、ある時間のある場面の一瞬の時だ。そこにはその人たちの人生があり、実際に生きていた人たちだ。

家族が家族をつくり、そして私がいる。その私も家族をつくった。自分の子ども達も家族をつくりそれぞれ暮らしている。

そんなことを思うと、やっぱり、これは手放せないかな…。また元の箱にしまうことにした。



つづく